銀魂×ハヤテ！悪ノ娘物語

銀凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀魂×ハヤテ！悪ノ娘物語

【Ｎコード】
Ｎ３６１１Ｔ

【作者名】
銀凪

【あらすじ】
銀魂×ハヤテシリーズの小説です。今回は悪ノ娘をやってみました。内容は歌詞に沿っています。是非、読んでみてください！

序章（前書き）

銀八「えー、これから銀魂×ハヤテ！悪ノ娘物語が始まる。実際悪ノ娘の小説が出てるがあの本のように（ピーーーーー！）の（ピーーーー！）だったり（ピーーーー！）を（ピーーーー！）したのは実は（ピーーーー！）じゃなくて（ピーーーー！）だったり（ピーーーー！）の（ピーーーー！）とかというなんかややこしい設定はしてないから。一応歌詞に沿ってこの小説書いてるから。あと狩物語書いてるのにこれ書いていいのかよって思った奴。廊下に立ってろ。じゃ、最後まで見てってくれよなー。」

序章

ズル・・・ズル・・・ズル・・・

どこからか何かを引きつる音が聞こえる。

「ハァ・・・ハァ・・・ゲホッ！」

どこからか少年の息を切らす声と吐血の音が聞こえる。

「こ・・・これで僕も・・・終わりか・・・」

少年の弱気な声が聞こえた。少年は兵士らしい。腰には帯びたたしい量の血がついた長剣がぶら下げられていた。

「どこだ！どこに行った！」

「探せ！『風殺しのハヤテ』を探せ！」

遠くの方で敵兵の声が聞こえた。

「し・・・しまった・・・」

風殺しのハヤテと呼ばれた少年は慌てて近くの茂みに隠れた。

「おい、これって・・・」

「ああ。あいつの血だな。」

そんな会話が聞こえたのでハヤテは自分の体を見て見た。右肩に深い切り傷があり、そこから血が流血していた。

「くっ・・・」

「ここで途切れてるな・・・」

「そうだな・・・用心しろよ。深手を負ってるとはいえ不意を突いて斬られるかもしれないからな。」

「そうですね。」

「「なっ！」」

ズシャアア！

敵兵の後ろの茂みから声が聞こえた。だが彼らは振り向く前に命

を失っていた。そう、ハヤテが斬り捨てたのだ。
「・・・ウウ！駄目だ・・・体中が・・・」
弱音をはいたが何とかここから離れようと思い、傷だらけの体を引きずりながら前へ前へ歩いて行った。

風殺しのハヤテ・・・
敵味方から恐れられている有名な傭兵。報酬の為ならばどんなことでもする。それが人斬りだろうが犯罪だろうが。だが彼もこの戦場で傷を負い、逃げ出していたのだ。

「あ・・・あと・・・す・・・少し・・・」
ハヤテは何とか戦場から離れる事が出来た。だがその直後、限界が来てその場で倒れてしまった。

「ん？何だこいつは？」
「どっかの兵士みたいですね。傷だらけですよ。」
「うーん・・・連れて帰るか。」
「いいんですかぃ？そんな事をして。」
「別にかまわん。」
「はぁ・・・流石『悪ノ娘』と呼ばれているだけありますね。」

翌日。ハヤテは目を覚めた。だがここがどこだか分からない。
「お、目が覚めたか！」
隣から少女の声が聞こえた。目を向けるとそこには金髪でツインテールの十三歳くらいの少女が座っていた。

「あ・・・あなたは・・・・」
「私は三千院ナギ。この王国の王女だ。」
「な・・・三千院・・・ナギ・・・。」
少女の名前を聞いたハヤテは驚いた。三千院ナギ・・・この近辺でこの名前を聞いた者は驚きまわるあるいは失神する。その理由は・・・彼女が『悪ノ娘』だからだ。

序章（後書き）

新八「ちょっといいんですか！まだ狩物語終わってないのに！」

作者「いいじゃねーか。書いてみたらこっちの方が進んじゃったんだよ！」

マリア「裏話を言わないでください。」

高杉「狩物語はどうするんだ？」

作者「ちょいちょい更新していく。」

新八「あと僕たち出演しますか？」

作者「・・・・・・・・・・」

新八「おォォォォォォォォォォォい！何かいきなり無口になったんですけどォォォォォォ！」

第一章（前書き）

作者「はい、本編はここから始まります。」

高杉「ていうか役はどうなってんだ？」

作者「それは後書きにて言いまーす。

第一章

ナギに助けられ数ヶ月が立った。風殺しのハヤテは今、この黄色王国の王女である三千院ナギの執事となっていた。
「お姫さま。朝食の時間ですよ。」
「ハヤテか・・・今行くから待ってろ。」
朝、ハヤテはいつも通りナギの寝室へ向かいそこからナギと共に朝食を食べる。で、その後はナギの話を聞いているのだ。
「はぁ・・・一体私が何をしたのだ？私の事を悪ノ娘とか言ってるが私は何一つ悪い事をした覚えはないぞ。何で平民どもは騒ぎまわるんだ？」
ナギの話は大体が愚痴である。しかも内容は政治的ばかり。ハヤテはそんな事が分からないので大体は聞き流ししていた。
昼は城の兵達に剣の稽古をしていた。
「1番・・・ハードボイルドの小銭形だ・・・よろしく頼む・・・」
「あ・・・あの～・・・何ですかそれ？」
ハヤテは時代無視して存在しているバイクを見て質問のした。
「これは俺の相棒よ・・・それよりカミュ、ロックで頼む。」
「カミュって何ですか？」
「カミュはカミュだろうが。」
「だから分かりませんって・・・あの・・・いい加減剣の試合をしませんか？」
ふっ・・・これだから男って奴は・・・余りせっかちだと女が逃げるぜ？
「あの・・・何勝手にナレーションしてるんですか？試合をしないなら出てって下さい。」
「じゃあ俺がやりますよ。」
「え？」
ドッカァァァァァァァァァァァァン！

突然小銭形の足場が爆発を起こした。その後、小銭形は青空の彼方へ飛ばされていった。
「これで大丈夫でさぁ。」
「ありがとうございます。沖田さん。」
沖田。彼はナギの護衛兵であり、ハヤテの親友である。
「それよりどうかしたんですか？バズーカなんて持って歩いて。」
「今葵王国のトッシー王子が来てるみたいでさぁ。」
「ああ・・・お嬢様の婚約者ですね。」
「ったく、何であんな奴と婚約するんですかね？笑い声が気持ち悪くて射殺しようと思いましてねぇ。」
「それ・・・駄目なんじゃないんですか？」
「今あいつの脳天にバズーカを打ち込みたいでさぁ。」
そんな沖田の愚痴を聞き流しながらハヤテはナギがいる部屋の方を見た。婚約者がいるという事は前にも聞いていた。それは仕方ないことだと自分で言い聞かせていたがどこかもやもやしている部分があった。

「で、いつにするんですか？式を挙げるのは？」
「もう少し待て、まだ私は十三だ。」
ナギはトッシー王子に向けてこう言った。トッシー王子はすぐに式を挙げたいと思っているのだがなかなかナギがＯＫサインを出さないのだ。
「別にいでこざる。愛に歳の差なんて。」
「はぁ・・・別にいいだろ。このロリコンが。」
ナギはそう言って部屋を出て行った。
「あ！待つでござる！まだ話は」
「その話はまた後でお願いする。今日はこれで。」
そう言って部屋の扉を閉めた。
「・・・ねぇ・・・俺って嫌われてるでござるか？」
「しらねーよ。そんな事よりキャバクラ行っていい？」

付き人である松平にこう言ったが彼の頭はキャバクラの事で一杯だった。

剣の稽古を終えたハヤテは水道で顔を洗っていた。
「お疲れィ。」
「沖田さん。」
隣に沖田がやって来た。彼も蛇口をひねり水を飲み始めた。
「今日も大変でしたね。」
「別に・・・これでも以前は傭兵だったので。」
「そうだったな・・・風殺しのハヤテって言われた時代が懐かしいか？」
「懐かしくありません・・・ただあの頃はただ人を斬りまくっていたので・・・生き残るために・・・」
そう言いながらハヤテは自分の手を見た。この手でたくさんの命を奪って来たのだ。自分が生き残るために。
「ホント・・・今思えば・・・罪深い事です・・・」
「・・・そうだな。」
沖田は水を飲み終えた後、自室へ戻るとハヤテに告げ水道場から出て行こうと思った。だが途中で真っ白に燃え尽きたトッシー王子を見つけた。
「何があったんだ・・・まぁいいか。」
そう呟き部屋へ戻って行った。

それから数日後、ハヤテは買い物のために隣の緑王国へ来ていた。
「えーっと・・・あとはお嬢様に頼まれた飴玉と・・・沖田さんに頼まれたＳＭグッズ？何でこんなことが書かれているんだ？」
そんな事を呟いていたら耳の中に歌声が聞こえた。歌声をたどりながら歩いていると人盛りが出来ている噴水前についた。噴水の前には一人の少女が歌を歌っていた。その少女の髪の色は桃色で見た目も美しい少女だった。そんな彼女を見たハヤテは思わずこう言っ

た。

「き・・・綺麗な人だな・・・」

その瞬間、ハヤテはその少女に一目ぼれした。

第一章（後書き）

この話の設定

作者「え～ここでは役の事を書きたいと思います。」

新八「ここで言うんですか・・・」

作者「さて、メガネの言った事は気にせずまいりましょう。」

悪ノ娘：ナギ
悪ノ召使（ここでは悪ノ執事）：ハヤテ
青の王子：トッシー
緑の娘：ヒナギク

作者「今現在ではこのような役割です。」

高杉「あれ？沖田の役割は何だ？」

作者「沖田の役はオリジナルとして出しました。」

マリア「いいんですか勝手にオリジナル設定作って・・・。」

第二章（前書き）

ヒナギク「ちょっといいかしら？」

作者「何だ？」

ヒナギク「私が緑の娘という事はまさか・・・」

作者「・・・・・・・・・最高にハイって奴だ！！」

ヒナギク「何ジョジョネタやってるのよ？というより質問に答え」

作者「はい！というわけで本編の始まり始まりィィィィィィィィ！！」

第二章

ここは黄色王国から少し離れた村。かぶき村。
「はぁ・・・一体何を考えてるんだろうねェ・・・」
村の酒場の主人であるお登勢が手にした新聞を見ながらこう言った。
「マタアノ国ノ事デスカ？」
隣にいる住み込みで働いているキャサリンがこう言った。
「そう。ったく、何考えてんだろうね。悪ノ娘って・・・」
「ソンナ事分カリマセン。タダ自分ノ事シカ考エテイナインジャナインデスカ？」
「だねぇ・・・ホント・・・子供っぽいよ・・・それより銀時はどうした？」
「アノガキデスカ？マダ寝テルト思イマス。」
「はぁ～仕方ないね。」
お登勢はこう言った後上に向かってこう叫んだ。
「コラァァァァァ！クソガキィィィィィ！とっとと起きろォォォォォ！お天道様がもう顔を出してんだよこのヤロォォォォォ！」
「とっくに起きてるわクソババァァァァァァァァ！」
上の方から少年の声が響いた。しばらくして十三歳くらいの少年が下に降りて来た。
「ったく、毎日早く起きるんだよ。アンタはもうここの従業員だから。」
「しゃーねーだろ。親父もお袋も朝は苦手だったんだ。その血が俺にも」
「ソンナノ言イ訳ニ入ラネーヨ。」
「うるせーよ腐れ猫耳。その耳引っこ抜いてやろうか？」
「ンダトコノガキ、オ前ノソノ股間ノアナログスティックモ引ッコ抜イテヤロウカ？」

「喧嘩は後でやりな。もう店開けるよ。」
そう言いながらお登勢は店を開けた。

「姫様！どうかこの考えを止めてください！」
「我らだって同じ人間です！」
下の方から町の住人がギャーギャー騒いでいる。そんな中、ナギは部屋のカーテンを閉め閉じこもっていた。
「朝からうるさいですね・・・」
「ああ・・・ったく・・・私の意見が聞けんというのかあいつ等は？」
「みたいですね・・・」
ハヤテがこう呟いた後、ナギはハヤテの所へ近づいて行った。
「なぁ、もしお前があの下の奴らと同じ立場だったらどうする？もちろん私に服従するよな？」
「ええ。」
笑顔でハヤテは答えた。その笑顔を見たナギも笑顔になった。
「そうか・・・味方はお前だけだな。」
「沖田さんは？」
「あいつはトッシー王子の悪口しか言わない。」
「でしょうね。」
笑いながらこんな会話をしていた。そんな中でもハヤテの脳裏にはあの少女の事が思い出されていた。

緑王国、あの少女はいつものように噴水の前で歌を歌っていた。
「皆さん、ご静聴ありがとうございます。」
そう言って軽くお辞儀をした。その後は裏方へ回り帰路へ着いた。だがその途中、見知らぬ少女が倒れていた。
「ちょっと！あなた大丈夫！」
「う・・・ん・・・」
「意識はあるのね・・・」

「は・・・は・・・」
「ど・・・どうしたの！吐きそうなの！」
グゥゥゥゥゥゥ～
「へ？」
「腹減ったアル・・・。」
その後、少女は町のパン屋へ行き、倒れていた少女にパンを与えた。
「ありがとう！パンうまかったアル！」
「どういたしまして。」
腹をさすりながら少女は微笑んだ。
「それよりあなたはどこの人？緑王国では見かけないけど・・・」
「・・・私は黄色王国の外れの方から来たある。」
「黄色王国・・・！どうしてここへ？」
「最近税金が重くなったアル・・・だから・・・パピーとマミーは革命軍って言うのに入ったアル。でも結局はそれがばれて牢屋行きになって・・・」
「逃げて来たのね・・・」
「うん・・・。」
倒れていた少女は小さくうつむいていた。
「大丈夫。あなたもご両親も助かるわ。」
「マジでか！」
「ええ。あなたの事は私が助けるから。」
「いいアルか！すまないアル！」
「いいわよ。それよりあなた・・・何て言う名前なの？」
「私は神楽アル！ねーちゃんは何て名前アルか？」
「私はヒナギクよ。ヨロシクね。」
「うん！」
そう言って神楽とヒナギクは強い握手をした。
「あ～いつになったら結婚できるんだろう？」

「しらねーよ。嫁探してんだったらキャバクラ行けキャバクラ。」
「え～ヤダよ～松平みたいにそんな事したくな・・・」
丁度この辺を通りかかっていたトッシー王子の視界にヒナギクの姿が映った。その姿を見てトッシー王子はこう呟いた。
「・・・あの子・・・いい・・・・。」

第二章（後書き）

おまけコーナー

神楽「キャッホーイ！私がようやく参戦アルー！！」

銀時「おい！俺はガキの頃の姿かよ！！」

作者「そうでーす、後のある展開のため銀さんは子供時代の姿で登場させました。後にどんな展開になるのかは・・・お楽しみです。」

新八「最初っからネタばれはまずいですからね。」

マリア「でも悪ノ娘と悪ノ召使いの話を知っている人はオチ知ってますけどね。」

高杉「それ言っちゃ駄目ェェェェェェェェ！！」

第三章（前書き）

作者「はぁ・・・狩物語も書かないとな・・・」

律「ちょっと待ったー！！休載中の混沌物語はどうなったー！！」

作者「おわ！！混沌物語の方の律かよ！いきなり出てくるなよ！！」

高杉「関係ないテメーは引っ込んでろ！！最近混沌学院でも出番ねーくせに！！」

律「それ言うなよォォォォォォ！！」

第三章

数日後、ハヤテはまた緑王国へ来ていた。もちろんヒナギクの歌声を聴くために。
「いるかな・・・あの人。」
そう言いながら耳を澄ましていた。すると聞こえた、あの少女の歌声が聞こえたのだ。どうやら前と同じ噴水の所から聞こえる。少し胸をわくわくさせながら移動していた。

「なぁ、何でハヤテの奴あんなにうきうきしていたんだ?」
「さぁ?」
ナギの部屋。今ここでナギと沖田は横になりながら漫画を呼んでいた。
「すみません、八巻貸して下さい。」
「ああ、しかしいつ見ても面白いな。デデデでプププな物語は。」
「やっぱりこればカービィ漫画で一番面白いわ。」
そう言いながら沖田はせんべいをバリバリ食べながら漫画を見ていた。

そんな中、ハヤテは噴水の前でヒナギクの声を聞いていた。歌い終わった後、誰もが拍手をした。それはもちろんハヤテも拍手をした。
「皆、いつもありがとう!」
そう言ってヒナギクは去って行った。
「綺麗な声だな〜。」
「う〜ん・・・とても綺麗な声だ。」
後ろの方から聞き覚えのある声が聞こえた。その声の主はトッシー王子だったのである。軽く変装しているが。ハヤテはその変装を見抜いたのだがここで騒ぎになるとアレだから少し距離を置いた。

その夜。ヒナギクと神楽の元へとんでもない情報が耳に入った。
「嘘アル！パピーとマミーが島流しなんて！」
「そうよ！嘘言わないで！」
情報源である長谷川に二人はこう質問攻めをした。
「だからホントらしいって・・・ここに書いてある。」
神楽は長谷川が持っている紙を受け取り文章を読み始めた。それは島流しリストでその中に神楽の両親の名前が書かれていた。
「あ・・・あ・・・」
「どうやらこれでも罰は軽い方らしい・・・処刑されるよりましだと思うけど・・・」
「もう会えないアルか！パピーとマミーに会えないアルか！」
「・・・分からない・・・」
うつむいて長谷川はこう言った。涙目の神楽はその場で泣き始めた。

その頃、黄色王国では。
「これでいいんですか？」
「ああ。」
王国の兵士達が島流しリストに載ってた者が乗っている船を出させ、帰路についていた。
「しっかしあのおっさん強かったな・・・」
「革命するって言ってたからな・・・イテテ・・・」
「オイ大丈夫か？赤くなってるぞ。」
「大丈夫だ・・・でもあの一突きはよかったな。」
「ああ、何せ腹に見事命中したからな。あの後あのおっさんの嫁らしい人にも襲われたけど・・・。」
「いいんじゃね？どうせ島につく前にうず潮にのまれて死ぬからよ。」
「その事・・・ナギ様に伝えた方が」

「別にいいよ、メンドクサイ。」
そんな会話をしていた。

翌日。ハヤテは昨日と同じように緑王国の噴水前へ行きヒナギクの歌を聴きに来た。だが様子が違っていた。ヒナギクの横に神楽が立っていたのだ。
「誰だあの子？」
「さぁ？」
「知ってる奴いるか？」
「しらねーよ。」
そんな声が次々と上がった。
「皆さん、お話があります！」
ヒナギクがこう声を上げた。
「実はこの子の両親が黄色王国に捕まり島流しされました・・・この子はまだ幼い・・・そんな事があっていいのでしょうか！ただ平民を虐待する・・・そんな事があっていいのでしょうか！」
突然そんな事を言い出したのだ。もちろん周りのヒナギクファンの連中は騒ぎたてた。だがハヤテは違った。心の中でこう思っていた。

この人は・・・お姫様の全てを否定するつもりなのか・・・

その時、ハヤテの脳裏にナギの顔が浮かんだ。そして自分がやっている事がナギに対して申し訳ないと思った。
「・・・スミマセン・・・お姫様・・・」
小さく呟きハヤテは城へ戻って行った。

第三章（後書き）

おまけコーナー

高杉「なぁ、この話読み返したらハヤテがナギの事を『お姫様』って呼んだり『お嬢様』って呼んだりしてるな。アレどっちが正解なんだ？」

作者「・・・お姫様です・・・くせでお嬢様って書いちゃうんだよな・・・」

第四章（前書き）

作者「さ～て、今回からすごい事になってきますよ！！」

ヒナギク「そうなの・・・フフフッ。」

作者「こ・・・怖い笑顔ですね。」

第四章

その日の夜。

バシィ！

ナギの部屋からビンタの音が響いた。ビンタをされたのは島流しをした兵士。

「貴様ら・・・一体私に黙って何をやっているのだ！」

「ひ・・・ひぃ。」

「島流しなどやっていいと誰に了承を得たのだ？」

「・・・ひ・・・ひぃ！」

「誰に了承を得たのだ！」

「ひぃ！」

「どうせ、言わぬ気だろ。分かってるのだぞ。貴様らの独断でそんな事をしたというのは。」

「す・・・しゅみましぇん。」

「許さん！こいつらを牢屋の中に一生ぶち込んでおけ！」

ナギがそう言った後、沖田の部下がおびえる兵士を連れて部屋を出て行った。

「ったく・・・何考えてんでしょうね。」

「ああ・・・処刑にすればいいものを・・・」

「アンタも何考えてんだよ。」

沖田はナギに向かってこう言った。

「・・・あ、そうだ。きょうの夕刊見ましたか？」

「どうしたのだ？何か書いてあったのか？」

沖田から新聞を受け取り、ナギは中を見始めた。新聞にはヒナギクの事が書かれていた。

「・・・何だこいつは・・・偉そうなことを言いおって。」

「全くですね。どうします？」
「いつか処分しておこう。」
新聞をしまいながらナギはこう言った。そしてある事に気がついた。
「あれ？ハヤテはどこに行ったのだ？」

その頃、緑の国のヒナギクの家。
トントン
「はい？」
ヒナギクが扉を開けた。そこには同い年くらいの少女と長髪の男性とゴリラ顔の男性が立っていた。
「あなたは？」
「私は革命軍リーダーの西沢歩と申します。」
「俺は幹部の近藤だ。」
「俺は幹部の桂だ、ヅラではない。」
「革命軍の人が・・・どうしましたか？」
「あなたをスカウトしに来ました。」
こう言った後、しばらく沈黙が流れた。
「・・・私はいいです。」
「え？」
「私は戦争で国を開け渡そう謎考えていません。あの人達も人間です、きっといつか分かりあえます。」
「・・・ではあなたにこの剣は必要ないと・・・。」
西沢は右手に持っている剣を指さしてこう言った。
「ええ。」
その後、西沢は後ろを向き帰り始めた。
「り・・・リーダー！いいんですか！」
「別にいいです。本人も嫌がってるようなので。」
「でも」
「私がい言って言うんです。大丈夫でしょう。」

「は・・・はぁ・・・」
その後、桂と近藤は西沢の後を追いかけるように走って行った・・・だが。
「殺人だァァァァ！」
「見張りが殺されたァァァァァ！」
突然騒ぎが発生したのだ。
「チッ！小癪な！」
「一体誰が！」
辺りは暗闇、相手もこの暗闇を利用して攻撃してるに違いない。
「リーダー！ここは俺達に任せてくれ！」
「でも・・・」
「いいんだ！」
桂と近藤に守られながら西沢はヒナギクと神楽を連れて走って行った。

「・・・リーダー達・・・大丈夫かな？」
「大丈夫さ・・・きっと――――」
暗闇の中、桂と近藤はこんな話をした。会話の後は口を閉じて全神経を集中させ敵の居場所を探った。
ヒュン
「音がした！」
「近くだ！」
「罠かもしれん。」
「ああ。」
「違ったらどうするんです？」
突然何者かの声が聞こえた。反応して振り向こうとしたが無駄だった。何故ならそこで二人は斬られたのだから。
「・・・安心して下さい。急所は外しています。」
斬り捨てた桂と近藤に向けてハヤテはこう言った。

「・・・向こうの方ですね。」
そう呟きハヤテは前へ進んでいった。彼の眼は風殺しのハヤテの目となっていた。

第四章（後書き）

おまけコーナー

ヒナギク「フフフッ、作者さん。本当に次回が楽しみですね。」

作者「は・・・はひ・・・そうですねぇ。」

新八「なんか怖いですよヒナギクさん！」

マリア「ええ・・・。」

高杉「しばらくは距離を置いておこう。」

第五章（前書き）

作者「さて、俺生誕祭り――――」

ヒナギク「血の舞う誕生日にならないように気をつけてね♪」

作者「・・・・・・・・・・ヤベーな・・・今回の話。」

第五章

ハヤテから逃走しているヒナギク達はとにかく走っていた。
「はぁ・・・はぁ・・・大丈夫？」
「ええ・・・神楽いる？」
「いるアル。それよりあの長髪とゴリラは無事アルか？」
「・・・分かりません。しかし、彼らは悪運が強いから大丈夫だと」
「本当に大丈夫アルか？」
そんな会話をしながら走っていた。
しばらく走っていると分かれ道の所へ出た。
「どうしよう。二手に分かれて・・・」
「私は一人でいいネ！この先の家に行って応援を呼んでくるアル！
ヒナギクは西沢と一緒に逃げるアル！」
「神楽・・・怪我しないでね。」
「合点承知アル！」
そう言って神楽はヒナギクと西沢の別の方の道を走りだした。
「さぁ、私達も行きましょう。早く逃げて隠れるんです！」
「ええ。」
ヒナギクも西沢と一緒に別の方の道へ向かい走り出した。だがその様子をハヤテはしっかりと見ていた。

数分後。ヒナギクは村の外れにある大きな岩の陰に隠れていた。
隣には西沢が辺りを見回していた。
「なんとか逃げたれたみたいね・・・。」
「ええ・・・神楽・・・大丈夫かしら。」
「分からないわ。それより応援が来るまでここで待ちま」
「無理ですよ。」
聞き覚えのない少年の声が聞こえた。次の瞬間、斬撃の音が響き西沢が倒れる音が聞こえた。

「え！」
「探しましたよ・・・お嬢様の存在を否定するなんて・・・重罪ですよ。」
目の前に少年がいる。しかし辺りは暗く顔までは見えない。
「だ・・・誰？誰なの？」
ヒナギクはこう言ったが少年は答えなかった。
「に・・・にげ・・・逃げて・・・」
西沢が小さな声を上げてこう言った。
「に・・・西沢さん・・・」
「大丈夫です、あの人は死にはしない程度に斬りつけましたから。」
そして剣を構える音が聞こえた。ヒナギクは西沢の言う通りその場から逃げようとした。
「・・・逃しません。」
少年はヒナギクの後を追って行った。

ヒナギクはどこへ逃げればいいのか分からなかった。どこへ行っても後ろから足音が聞こえてくる。村の内部は自分がよく知っている。だがどんな段差が激しい場所や激しい斜面の所でもその少年は難なく追ってくる。
（そうだ・・・あの森なら・・・）
この村の近くにある森は一部迷路みたいになっていて分かりにくくなっている。そのため逃げるにはうってつけの場所なのだ。しばらく走っていたら村の外の森の入口にたどり着いていた。
「こ・・・ここに逃げれば・・・」
「僕から逃げれると思うんですか？」
森の入口の方から声が聞こえた。あの少年の声だ。
「な・・・何で・・・」
「分かりやすいんですよ。大抵の人はここに逃げ込むという話を何回か聞きましたから。」
その後、ヒナギクは村の方へ戻ろうと思い後ろを振り迎えった。

だが。
シュン！
「あっ！」
背後から何かの音がし、その後でヒナギクの足に激痛が走ったのだ。
「な・・・何・・・」
足を見たらそこには矢が刺さっていた。
「嘘・・・」
背後から足跡が聞こえる。何とか逃げようとしたいが矢には毒が塗られていて足が麻痺して動かなかった。
「あなたを・・・始末します。」
少年の震える声が聞こえた。
「お姫様をあんな風に言わなければ・・・こんな事にならなかったのに・・・」
その後、金属音の音がした。少年は後ろに隠し持っていた槍を手に取ったのだ。
「・・・さよなら。」

シャッ！

音がした後、背中に槍が突き刺さる感触がした。そしてそこから血が溢れ出て来た。槍はかなり深く体に突き刺さっていた。
「だ・・・誰・・・あな・・・た・・・は・・・。」
ヒナギクは最期の力を振り絞って少年の顔を見ようとした。
「・・・・・・あなたは・・・」
その少年がハヤテである事をヒナギクは確信した。名前までは知らないがよく自分の歌を聞いてくれる同い年くらいの少年だと思っていた。その少年が今。自分を槍で刺したのだ。
「あ・・・あなたは・・・一体・・・」
しばらく間をおいてハヤテはこう答えた。

「僕は・・・悪ノ執事です。」
そう言った直後、手に持った槍を再びヒナギクの体に突き刺した。

第五章（後書き）

おまけコーナー

ヒナギク「皆さん、作者の馬鹿はどこに行きましたか？」

新八「さ・・・さぁ？」

マリア「分かりませんわ。」

高杉「さぁな～？」

ヒナギク「フフッ、なら出てくるまで私ずっとここにいます。」

マリア・新八・高杉「・・・・・・・・・・・・・」

第六章（前書き）

銀凪「更新遅れてすみません。狩物語を更新していたので・・・」

マリア「じゃあ、頑張ってください♪」

第六章

その頃、沖田は城の中を走っていた。その理由はハヤテを探していたのだ。
「ったく、どこに行ったんだあいつ？」
何故ハヤテを探しているのかというと・・・数分前。ナギから「ハヤテはどこに行った？オイ、探しに行って来い。探しに行かないと給料半分カットな。」と言われたのだ。沖田は給料の為ハヤテを探していたのだ。
「っかしーなー？城中探してもいねー。」
「どうかしたんですか？」
メイドの一人がこう聞いてきた。
「丁度いい所に。オイ、ハヤテしらねーか？」
「ハヤテ様なら・・・少し前にお出かけになりましたが。」
「どこに行ったか分かるか？」
「そこまでは分かりませんが。」
「そうか、まあいい、ありがとう。」
話を聞いた後、沖田は馬小屋へ行って自分の愛馬『サド丸』に乗ってハヤテを探しに外へ出かけて行った。

ハヤテは人の目を避けるように歩いていた。手には血がべっとりと付いた槍を持っている。いざという時に作った即席の弓はパーツを分解した後森に向かって投げ捨てたのだ。
「・・・早く戻らないと・・・」
小さくこう呟いた。少ししていきなり雨が降って来たのだ。だがハヤテはそれを気にせず歩きだしたのだ。
しばらくして馬の鳴き声が聞こえた。前を見るとサド丸に乗った沖田がやって来た。
「ハヤテ、何でこんな所にいるんだ？」

「・・・・・・。」
「おい、何か言えよ。」
「・・・・・・。」
「ったく、いいからさっさと――――」
沖田はハヤテの手に握られている槍が血だらけなのに気付いた。
「お前・・・一体何を・・・？」
「・・・あの女を・・・桂ヒナギクを殺してきました。」
ハヤテの言葉を聞いて沖田はぞっとした。今日の夕刊でヒナギクがナギの批判の事が書かれていたのだ。
「まさか・・・でもお前・・・夕刊は――――」
「夕刊で出る前にあいつの存在は知ってました。」
しばらくの間二人は喋らなかった。聞こえるのは雨の音のみ。
「・・・話はあとで聞く。今は城に戻るぞ。」
「・・・分かりました。」
そう言ってハヤテはサド丸の上に乗った。

黄色王国城内。ハヤテは全ての行いをナギに話した。
「ハヤテ・・・お前。」
「・・・罰を受ける覚悟はできています。」
うつむいてハヤテはこう言った。しばらくしてナギは沖田にこう言った。
「しばらくハヤテと二人っきりにしてくれ。」
「分かりました。」
そう言って沖田は部屋から出て行った。
「・・・・・・どうして・・・どうしてお前がこんな事を！？」
ナギは泣き叫びながらこう言った。
「お姫様を・・・酷く行ったあいつが許さなかったのです。」
「だったら私が処分したのに。」
この言葉を小さく言いながらナギはハヤテに抱きついた。
「手を汚すのは・・・私だけで・・・十分なのに。」

小さく呟いた後ナギは涙を流し始めた。それを知ったハヤテはナギを抱きしめた。
「・・・いいえ・・・手を汚すのは僕だけで十分です・・・あなたは・・・あなたはここで笑っていてください・・・涙なんて似合いませんよ。」
ナギを抱いたままハヤテはこう言った。
「ハヤテ・・・ハヤテェ・・・。」
ナギはそのままハヤテの腕の中で涙を流し始めた。

翌日。ヒナギクの死は朝刊に大々的に載っていた。どの新聞もナギが裏で絡んでいるのではないかと書かれていた。
「まさか・・・こんな事になるなんて。」
革命軍の一人がこう呟いた。自分達はヒナギクを仲間にして守ろうとした。その為にリーダーの西沢、そしてその側近である近藤と桂も出向いたのだが謎の人物にやられてしまった。
「どうすればいいんだ・・・いつ革命を起こせば。」
「当分は無理だな、リーダーも斬られて未だに動けないんだ。しかも革命となれば兵器や武器が必要だ。今の俺らにそんな金が―――」
その時だった。隠れ家のドアが開いて黒フードの男が入って来た。
「誰だ!?」
「名前を言え!!」
革命軍の兵士達は武器を持って男にこう聞いた。
「・・・俺の名はマヨラ13、お前らと同じ志を持つ。」
そう言った後、手元から金貨が大量に入った袋を取りだした。
「どうか仲間にしてほしい。」

第六章（後書き）

おまけコーナー

高杉「やっと更新したな」

新八「そうですね」

銀凪「・・・というわけで遅れてすみません。これからも温かいご声援お願いします」

第七章（前書き）

銀凪「あと少しで話の重要な部分をやります」

高杉「まぁ、重要っちゃあ重要だからな」

第七章

数日後、かぶき村にて。村の神父、高杉が教会の花に水をやっていた。彼の片目は包帯で隠れていた。だがこれでも優しい神父なのだ。

「高杉ー、お客さんだよー。」

「客？」

お登勢が呼ぶ声がしたので覗いてみるとそこには西沢が立っていた。

「知り合いかい？」

「まぁな。とりあえず教会の中に入れ。」

「はい。」

「お登勢さん、すまないがこの事二人で話をしたい。ちょっと教会の中には入らないでくれないか？」

「ああ、いいよ。」

そう言ってお登勢は自分の家に戻って行った。その後、高杉は西沢を協会にある自室に入れた。

「久しぶりですね。リーダー。」

「よせ、俺はもう革命軍のリーダーじゃねぇ、今は小さな村の神父さんだ。」

「・・・本当に革命を止めたんですね・・・本当に驚きました、私にリーダーの座を譲った後で姿を消して・・・それで今は神父なんて。」

「俺はもう武器を持たないって決めたんだ・・・どうせ戦ったっていろんなもんを失う。」

「ええ・・・でも私達は本当に自由のために戦って来た。」

「そうか、それより本題は何だ？今日ここに来たのは他のようだろ？」

高杉はそう言った後、少しの間をおいた。しばらくして西沢が口

を開いた。
「明日、革命を起こします。」
「・・・そうか。」
「それだけですか？」
「たりめーだ。今俺は革命軍じゃねーからな。」
そう言って高杉は立ち上がり、部屋を出て行こうとした。
「・・・死ぬ前にリーダーに会えてうれしかったです。」
「縁起でもねー事言うんじゃねー。生きて帰ったら顔を見せに来いよ。」
「・・・はい。」
返事をした後、西沢は教会から出て行った。

それからまた数日後。黄色王国にて。
「お姫様。ちょっといいですか？」
ハヤテがナギを呼んだ。
「何だハヤテ？」
「実は・・・ちょっとある噂話がありまして・・・」
「何だその噂話とは。」
「革命軍がそろそろ革命を起こすというんです。」
その話を聞いた後、ナギは笑いだした。
「何だ、また革命でも起こすつもりなのかよあいつら！」
「みたいですね・・・でも今回はどうなる事やら・・・」
小さくハヤテは呟いた。また今度もどうにかなる。そんな事をハヤテも思っていた。

革命軍の隠れ家。彼らはついに革命を行うため、移動を始めた。
「いいか、チャンスは一回きりだ！この日にあの王国を攻め落とす！」
「「「「「オー！！！」」」」」
「我らの自由の為に！悪ノ娘を倒す！この剣にかけて！」

「「「「「この剣にかけて！！！」」」」」
「ではいくぞ！我に続け！」
西沢が檄を飛ばした後、革命軍兵士達は王国に向かって走り出した。そんな中、近藤が桂にこう話しかけた。
「なぁ、攻めに行くときのセリフってやっぱ『御用改めである！』がいいよね。」
「貴様、何を言っている。『天誅！』の方がいいではないか。」
「え～？短すぎるって。だったら『御用改めである！』の方がいいって。」
「いやいや長すぎだから。そんな余裕ないと思うぞ。だったら『天誅！』の方がましだって。」
「そうか～？長い方がかっこよくない？」
「全然、ただの中二病だと思うけど。」
「何が中二だ！絶対に『御用改めである！』の方がいいって！」
「いやいや『天誅！』の方がまし！」
「御用改めである！」
「天誅！」
「御用改めである！」
「天誅！」
「御用改めである！」
「天誅！」
「御用改めである！」
「天誅！」
こんなくだらない事で二人は言い争いになった。
「よし！ならばリーダーに決めてもらおう！」
「おう！」
「という訳でリーダー、『御用改めである！』と――」
「『天誅！』攻め入る時にどっちが――」
二人は西沢に意見を聞こうと思ったのだがそこにはもう西沢の姿がなかった。

「「・・・・・・皆待ってくれェェェェェェェ！！」」
その後、二人は何とか全力疾走して仲間と合流した。

第七章（後書き）

おまけコーナー

高杉「次回から革命か」

銀凪「そうで～す」

マリア「じゃあそろそろ……」

銀凪「それ以上察知しないでね」

第八章（前書き）

銀凪「いや～、混沌学院をマジで必死に書いていたもんで……それで遅れてしまい……」

新八「知ってるならいいんですよ」

マリア「さっさとはじめてください」

第八章

ナギは自室でのんびりしていた。傍らにはハヤテがいた。
「今日も何もない日ですね。」
「それにしてもやけに静かだな。いつもは群衆共が下の方で騒いでいるが。」
そんな事を呟いていた。

一方見張り兵の方でものんびりムードは漂っていた。
「あ～マジで暇。」
「いつもは群衆共を押させたりしてっからな～。」
暇を持て余している最中、ある光景が見えた。
「ん？何あれ？」
「さぁ？」
よくよく見るとそれは革命軍達だった。
「はっ、また革命軍だよ。」
「ホント、しょーがねー奴らだな。毎度毎度お騒がせなんだよ。」
そう言って見張り兵は武器を持った。
「あいつらが近付いたととたんにこの槍でグサッと――――」
グサッ
何かが刺さる音がした。
「ん？どうした？もう槍でグサッと・・・オワァァァ！！」
その兵は腰を抜かして驚いた。隣にいた兵は額を矢で貫通されていたのだ。
「ヤロー！よくもやりやがったなー！」
「敵衆だ！ぶっ殺せェェェェェェ！！」
そう言って見張り兵達は革命軍に向かって行った。
「敵は目の前にあり！進め！」
革命軍の方も達向かって行った。

「ん？何か騒がしくないか？」
「そうですね～。」
ハヤテとナギがこんな会話を交わした後だった。息を切らせた沖田が部屋に入って来たのだ。
「大変だ！革命軍がまた襲って来た！」
「またかよ。」
「いや・・・今回はマジみたいですぜぃ。もう何名かやられちまったみたいでさぁ。」
沖田の話を聞いた後、ナギは軽く微笑んだ。
「何、気にすることはない。どうせまたあいつ等はやられるだけだ。ほっとけ。」
そう言って部屋のドアを閉めた。

「ハァァァァァァ！！」
掛け声とともに西沢は目の前の敵を斬り捨てた。
「次は左だ。あと少しで奴の部屋につく。」
前にいるマヨラ１３がこう言った。
「あら、何でこの城の内部を知っているの？そろそろ正体を現したら？」
西沢がマヨラ１３に向かってこう言った。
「・・・詳しくはこの戦いが終わった後だ。」
そう言ってマヨラ１３は先に進んでいった。

「オイオイオイ、こりゃまずいんじゃねーか？」
その様子を沖田はこっそりと見ていた。沖田はこの様子を王女に知らせようとすぐに部屋に戻った。
「王女！」
「何だ、また沖田か。」
「何かあったのですか？」

「・・・落ち着いて聞いてくれ。」
沖田は今さっき遭った事を二人に話した。
「・・・この城の内部を知ってる者？」
「まさか裏切り者が！」
「いや、そこまでは分かりません。とりあえず逃げましょう！」
「・・・そうだな。いずれはここも危なくなりそうだからな。ハヤテ！」
「ハイ。」
ハヤテはこの部屋の隠しスイッチを押した。すると暖炉の方から階段が現れた。
「これを使って逃げましょう！」
「おう！」
そう言ってハヤテ達は上の隠し部屋に逃げて行った。

数分後。
「ここだ。王女はここにいるはずだ。」
マヨラ１３の案内で西沢達はナギの部屋の前についた。
「ついに・・・来たのね。」
「ああ。」
扉を開け、中を確認した。だが中には何もなく、ただ部屋が散らかっていただけだった。
「いねーじゃねーか。」
「オイどうなってんだ？」
「どうやら隠し部屋に逃げたのだろう。」
そう言った後、マヨラ１３は隠しスイッチを押した。
「何これ？」
「隠し階段を出すスイッチだ。」
その後、再び暖炉の方から隠し階段が現れた。そして革命軍達は階段を登りはじめた。

第八章（後書き）

おまけコーナー

マリア「そろそろ佳境ですね」

高杉「そうだな」

律「作者ァァァァァ！！」

新八「ちょ！混沌物語の方の律さん！どうしてここに！？」

律「文句を言いに来たんだ！あいつ、混沌物語全く書いてないんだよ！！」

新八「……人気ないから……」

律「何て言った！？」

新八「さぁ？」

マリア「……作者さんも結構苦労してますね」

第九章（前書き）

銀凪「さて、もうそろそろこの話もクライマックスです」

高杉「最後まで頑張ってくれよ」

第九章

隠し部屋内、ハヤテ達はここで隠れていた。
「なぁ、何か聞こえてこないか？」
「さぁ？」
「まさか・・・」
ハヤテは確信した。革命軍共が隠しスイッチを使ってこの場所へ向かっていると。
「あいつら、ここに向かって来る。」
「何！」
「この場所に勘付いたんです！」
「でも・・・どうやって逃げれば・・・。」
絶望し、ナギはその場にへなへなと座り込んだ。そしてハヤテは意を決して隠し部屋からある物を持ってきた。
「・・・何だそれは？」
「ここにあった大きな布です。これを羽織って逃げてください。」
「逃げる・・・一体どうやって。」
「沖田さん、近くに緊急用の昇降口があります。そこからお姫様を連れて逃げてください。」
「お・・・お前はどうするんだよ！」
ハヤテが言った言葉に対して沖田は叫ぶようにこう言った。彼の質問にハヤテは静かにこう言った。
「・・・僕がここを押さえます。だから沖田さんはお姫様を連れて――」
「ふざけるな！」
泣き叫ぶようにナギはこう言った。
「お前も逃げるんだ！捕まったらどうせ殺される！」
「それでもいいです。」
「何で？何でだ！」

ナギの目から涙が出て来た。ハヤテはナギに近づき、ナギの目の涙を拭いた。
「あなたには生きていてもらいたいのです。」
「・・・私は悪ノ娘だ。殺された方があいつ等にとって――」
「だったら僕は悪ノ執事です。背負った罪は僕の方が多いです。」
そう言ってハヤテは沖田に早く行くようと目で伝えた。
「・・・いいのか、もし死んだら――」
「何度も言うけど僕はそれでもいいんです。お姫様が生きていられれば。」
「私はよくない、お前が・・・お前がいないと――」
訴えるようにナギはこう言ったが台詞は途中で止まった。自分の唇がハヤテの唇と重なっていたからだ。
「沖田さん・・・今のうちです。お姫様を連れて逃げてください。」
「・・・ああ。・・・じゃあな。」
沖田はナギを連れて逃げて行った。
「・・・・・・・愛しています・・・お姫様。」
そう小さく呟いた後、ハヤテは近くのタンスのある部屋に入って女もののドレスに着替えた。

数分後、革命軍達が階段を上がって来た。
「ハァ・・・ハァ・・・どこだ？悪ノ娘はどこだ！？」
「ここの部屋を探すのよ！」
革命軍達が隠し部屋を探しまわっていたその時だった。
「何だ、騒々しい。」
ドレスを着た女性らしき人物が現れたのだ。
「・・・悪ノ娘ね。」
「・・・だったらどうする？この無礼共が。」
そう言った後、西沢は腰の刀を抜いて刃をその人物に向けた。
「悪ノ娘！ようやく貴様を倒す日が来た！」
西沢がいい放った後、周りにいた革命軍達が西沢と同じように刀

を向けた。
「・・・フッ、勝手にするがいい。」
「連れて行け！」
西沢の合図の後、数名の兵士達が辺りを囲んでその人物を連れて行った。

一方ナギと沖田は外につながる隠し階段から逃げ、何とか外へ逃げのびた。
「ハァ・・・ハァ・・・無駄に長い階段だったな～。」
額の汗をぬぐって沖田はこう言ったがナギはずっと黙っていた。
「・・・・・ハヤテ・・・ハヤテェ。」
たまに言う言葉はハヤテの名前のみ。その言葉と同時にナギの目からは涙が流れてきている。
「・・・行きましょう。あいつの行動を無駄にはできません。」
沖田はサド丸を呼び、ナギを背中に乗せ、白とは逆の方向に向かって走り出した。

翌日。革命軍が悪ノ娘を捕えたという情報はすぐに全国各地に伝えられた。その情報はかぶき村にも伝えられた。
「・・・無事に終わったか。」
今日の朝刊を見ていた高杉は小さくこう呟いた。その直後、教会の扉の方で小さな音が聞こえた。
「何だ？」
何かあった時の事を考え、服の中に小さなナイフを入れて高杉は外に出た。扉の前にあったものとは・・・。
「お・・・女の子？」
高杉がこう呟いた直後だった。
「腹減ったアル・・・。」

第九章（後書き）

おまけコーナー

ハヤテ「あの作者さん？この展開からもしかしたら……僕が――――」

銀凪「次回お楽しみにィィィィィィィ！！」

第十章（前書き）

銀凪「待たせてしまって本当にすみません。混沌学院の方に力を入れすぎていた為本当に待たせてしまいました」

マリア「本当です」

高杉「まったくだ」

新八「これからも気をつけてください」

第十章

黄色王国の牢獄、今ここに悪ノ娘に変装しているハヤテの姿があった。彼は牢獄に入っていてもナギの事を心配していた。革命が起きて数日、いつ処刑されてもおかしくない。だがハヤテは心の中で覚悟していた。ナギの為に死ぬのなら死のう。それが本望だと思っていた。

「ふぅ、これで一段落ね。」
背伸びをしながら西沢はこう言った。
「お疲れでござる。これ粗茶だが飲むでござるか？」
「いいわよ、マヨラ１３さん・・・いや、葵王国のトッシー王子。」
ここでいうけどマヨラ１３の正体はトッシー王子だったのだ。
「それにしても・・・何であなたみたいな王子が私達に手助けを？」
「・・・仇でござる。」
「仇？」
「そう、ヒナギクさんのね。」
トッシーは天井を見上げてこう言った。
「でも・・・本当に死刑で良いでござるか？島流しとか他にも罰は――」
「あなたは知らないのね、私達があいつにどんなひどい目にされていたか。」
そう言う西沢の目を見てトッシーは引いた。西沢の目は憎しみで染まっていた。
「・・・そうか。」
静かにこう言ってトッシーは部屋を出て行った。
「どこへ行くの？」
「松平に連絡。突然消えたから戸惑ってると思って。」
西沢の質問にトッシーはこう言った。

数日後、ハヤテがいる牢獄に足跡が響いた。
「・・・そろそろかな。」
ハヤテがそう小さく呟いた後、牢屋が開く音が聞こえた。
「さぁ来い、貴様の処刑を始める！」
目の前の兵士がこう言った。その後、乱暴にハヤテの腕を掴んで歩き始めた。そして広場の中央に集められた。
「群衆よ！見るがいい！忌々しき悪ノ娘の最期を！」
その後、広場の中央に設置されたギロチンの下にハヤテは寝かされた。
「さぁどうだ？悪ノ娘ェ！！死ぬという恐怖の味はよォ！？」
下品な声を上げながら兵士はこう言ったがハヤテは聞いていなかった。
（お嬢様・・・ご無事だろか。）
自分が死の間際というのにハヤテはナギの事を想っていた。

町はずれ、ここにも今日で悪ノ娘が処刑されると話題になっていたのでこの街の連中は誰もが広場の方に向かったので誰もいなかった。
「・・・今日かよ・・・あいつの最期。」
小さな酒場にいる沖田はこう言った。
「ん？お客さん、悪ノ娘と知り合いなんですか？」
「いいえ、今のはアンタの空耳じゃないんですか？」
「そうかな・・・まぁいいか。」
店のマスターは鼻歌をしながらキッチンに戻り、皿などを洗い始めた。
「あ、そうだ。お客さん、今日はちょっと早めに終わるけどいいかな？」
「どうしてだぃ？」
「見に行くんだよ！悪ノ娘の最期を！！」

そう言うマスターの顔は笑顔だった。
「いや～まさかこんな日が来るとは思ってもなかった！革命軍様様だな！！」
「・・・そうです・・・か。じゃ、行きますか。」
沖田はジュース代をカウンターに置くと近くで黙って座っていたナギと共に去って行った。

数分後、ギロチンの前に集まっている人々から「早く殺せー！！」「とっととブチ殺せ！！」「ざまぁ見ろ！！」「早く死ね、このクソ野郎！！」「早く死ねよバーカ！！」などという罵倒が飛んでいる。処刑の時間は午後三時、丁度教会の鐘が鳴る時間だ。
「・・・そろそろあの世へ行く時間だ、何か言い残す言葉は無いか？」
「・・・・・・・・・・・・」
兵士に何を言われようともハヤテはずっと黙っていた。
「何をぐずぐずしているんだ！？」
「さっさと首をはねろ！！」
「あの目障りなクソ野郎の首をとっとと切断しろ！！」
段々と民衆からの罵倒の音量は大きくなっている。
「オイ、まだかよ。」
「あと少しだ、我慢しろ。」
兵士達もこのような会話を交わした。そのうちの一人の兵士が再びハヤテにこう聞いた。
「そろそろ時間だが・・・本当に言い残す時間は無いか？」
この直後だった。教会の鐘が鳴り響いたのだ。それと同時に、ハヤテは民衆に向かってこう言い放った。
「あら、おやつの時間だわ。」
彼は口ではこう言ったが心ではこう思っていた。

（さようならお姫様・・・もし生まれ変わるなら・・・その時はまた・・・あなたの傍に。）

ハヤテがこう言い放ったと同時に・・・ギロチンが降って来た。
降ってきたギロチンはハヤテの首を切断した。

第十章（後書き）

ハヤテ「……あの、前回の銀魂×ハヤテでも僕は……」

銀凪「レッツパーリィ！！」

新八「いっても無駄ですよ。いまバサラやってます」

ハヤテ「……」

ヒナギク「いいじゃないの、そういう時は後で話すものよ」

新八「あの、ヒナギクさん。目が怖いんですけど」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3611t/

銀魂×ハヤテ！悪ノ娘物語

2011年10月24日20時06分発行